

演劇俳優における練習過程の熟達化

Expertise of Actors in the Process of Rehearsal

安藤 花恵¹

Hanae Ando¹

¹九州国際大学

¹Kyushu International University

Abstract: The process of rehearsal is divided into two phases; monitoring one's own performance, and evaluating it. The aim of this study is to investigate the expertise of actors in this rehearsal process. In the monitoring phase, novice actors practiced using a mirror more frequently than intermediate and junior expert actors, probably because they lacked ability to monitor their own performance. In the evaluation phase, novice actors can only evaluate superficial aspects of acting, while junior expert actors can evaluate not only superficial, but also sensuous aspects of acting. Moreover, they seemed not to have intention to evaluate or change their performance. At last, educational implications are discussed.

練習のプロセス

ある技能を習得しようと練習をおこなうとき、ただやみくもに遂行を繰り返しても、技能の熟達は果たせない[1]。練習中にパフォーマンスを改善していくプロセスは、自身の遂行を客観視し、それを評価し、修正するという過程を経ると考えられる (Figure 1)。

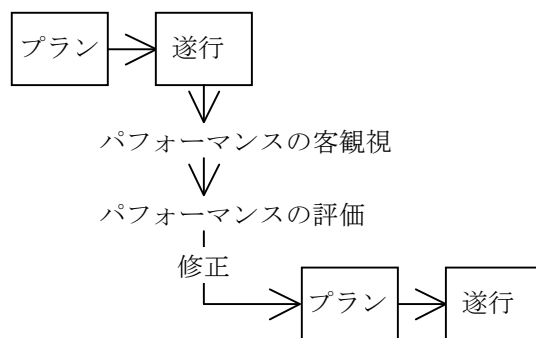


Figure 1. 練習のプロセス

学習者は練習中、自分が遂行したパフォーマンスを客観視して正しく把握し、パフォーマンスのどこが悪いかが評価し、それをもとにパフォーマンスを改善する、という活動を繰り返さなければならないのである。この過程における熟達化について、演劇俳優の実験結果をもとに考察する。

パフォーマンスの客観視

熟達の過程で、自らのパフォーマンスを客観視できるようになることは非常に重要であり、これまでも演劇[2]、日本舞踊[3]、ピアノ演奏[4]などでこのことが論じられてきている。しかし、自らのパフォーマンスを完全にモニタリングできるようになることは簡単なことではない。自分がおこなった身体動作が他者からどのように見えるのかを、身体動作をおこなった際の身体感覚から理解する必要がある、これは初心者には難しいと考えられる。演劇や舞踊などの練習場が鏡張りになっていることが多いのは、この客観視が難しいためであろう。そこで、練習の最中の鏡の使用について観察をおこなった。

被験者

演劇経験1年以下の初心者群、経験1~5年の中間群、経験5年以上の準熟達者群、それぞれ12名(男性6名、女性6名)、計36名の演劇俳優の練習の様子を観察した。この3群の俳優たちの練習後の演技は、3群それぞれうまさに差があると評定されている[5]。

方法

セリフが一言だけの短い脚本を4種類用意し、それぞれについて、1分間の練習の後に演技をおこなうということを3回ずつ繰り返した。計12分の練習時間中の様子をビデオ撮影し、観察をおこなった。練習中は横に鏡が置いてあり、自分の演技を鏡で確認できる状態であった。

結果と考察

練習中にセリフを発した回数のうち、鏡を見ながら練習した回数と、鏡を見ずに練習した回数の割合を示した図が Figure 2 である。ちなみに 12 分の練習時間で一度もセリフを発して練習をおこなわなかった被験者（初心者群 3 名，中間群 2 名，準熟達者群 4 名）のデータは除いてある。

鏡を見ながらセリフを発した割合について，熟達度（初心者，中間，準熟達者）を被験者間要因とした分散分析をおこなったところ，熟達度の主効果が有意であり ($F(2,24)=4.912, p<.05$)，中間・準熟達者群よりも初心者の方が鏡を見て練習をした回数が多いということが明らかになった。経験が浅く，身体感覚と身体動作の対応に関する知識の乏しい初心者は，練習をおこなっても自分がどのような演技をおこなっていたのか自分では判断できず，そのために鏡を使用していたと考えられる。一方経験が長くなると，鏡がなくても自分で自分の演技を客観視できるため，鏡を見ながら練習することが減るのではないかと考えられる。

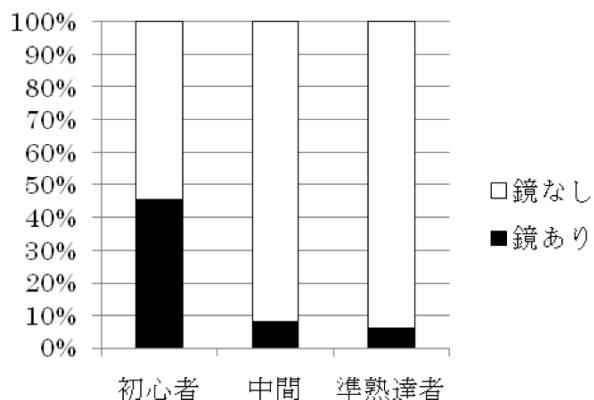


Figure 2. 練習中の鏡の使用の有無

ただし，本実験では練習中に実験者が同室にいたため，被験者が練習をおこないづらかった可能性が考えられた。今後実験者が同席しない条件での練習の様子を観察することで，より正確なデータが得られるであろう。

パフォーマンスの評価

鏡を見る，または，ビデオで演技を撮影して見るなど，パフォーマンスの客観視能力を補う方法は存在するが，それでは，ビデオフィードバックなどで正確に演技を客観視できた場合，初心者でも熟達者でも同様にその演技を評価することができるのであろうか。この「評価」という側面の熟達化を検討するために実験をおこなった。

被験者

演劇未経験者 10 名，短期経験者（経験 1 年未満）10 名，中期経験者（経験 1 - 5 年）10 名，長期経験者（経験 5 年以上）10 名であった。

方法

被験者に演技のビデオを見せ，評価させた。ビデオは，野田秀樹作の一人芝居，『売り言葉』の中から，「初恋」のシーンを女性が演じている様子を撮影したビデオを使用した。演技者は，初心者（経験 1 年未満）4 名，中間（経験 1 - 5 年）4 名，準熟達者（経験 5 年以上）4 名の計 12 名であった。演技者 1 名分のビデオを見せた後，その演技者について 11 の評定項目に 7 件法で答えてもらった。その後，その演技者の演技について，「良かったところ」「悪かったところ」を自由記述してもらった。以上の手続きを 12 名分繰り返した。12 名の演技者の順序はカウンターバランスをとった。11 の評価項目は，全体的な評価を尋ねる項目が 4 項目（「経験の長さ」「技巧のうまさ」「魅力」「好意度」），演技の表面的な部分について尋ねる項目が 4 項目（「棒読みでない」「動きがある」「表情が変化している」「二役の区別がついている（1 人で 2 役を演じるシーンであったため）」），演技の表面的でない部分について尋ねる項目が 3 項目（「堂々としている」「演技がその人にしっくりきている」「演技が脚本のイメージに合っている」）であった。評定項目の順序もカウンターバランスをとった。

結果と考察

全体的な評価

4 つの評定項目それぞれについて分散分析をおこなった結果，「経験の長さ (Figure 3)」と「技巧のうまさ」については，未経験者と短期経験者は初心者 < 中間 = 準熟達者というパターンであったが，中期・長期経験者は初心者 < 中間 < 準熟達者であった。

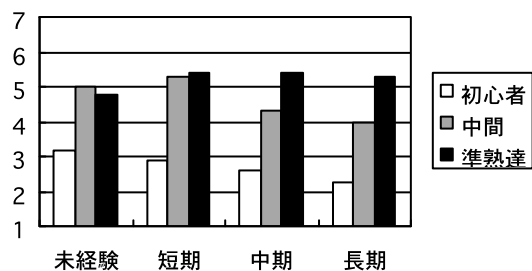


Figure 3. 経験の長さ評定

「魅力 (Figure 4)」においても未経験者と短期経験

者は初心者<中間≒準熟達者であったが、中期経験者は初心者≒中間<準熟達者であり、長期経験者は中間<初心者≒準熟達者であった。「好意度」も「魅力」とほぼ同じ結果であった。

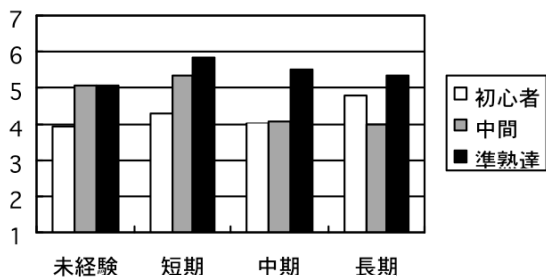


Figure 4. 魅力評定結果

以上から、すべての項目において未経験者と短期経験者は中間と準熟達者を区別できないこと、中期・長期経験者は項目によってさまざまな評価をくだすことが示された。

表面的な部分

同様に分散分析をおこなったところ、どの項目でも演技者の主効果のみ有意であった。演技者の主効果については、「棒読みでない」「動きがある (Figure 5)」「二役の区別がついている」については、初心者<中間≒準熟達者という結果であった。残る「表情が変化している」では、初心者<中間<準熟達者であった。つまり、演技の表面的な部分については、経験のない者でも経験者と同じ判断ができ、また、この部分に関しては数年の経験を積んで中間群になると、準熟達者と同程度のレベルに達するため、ほとんどの項目で初心者<中間≒準熟達者となると考えられる。

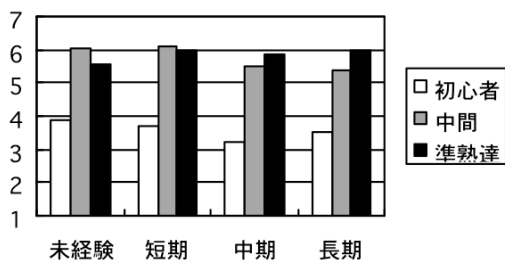


Figure 5. 動き評定結果

表面的でない部分

分散分析の結果、どの項目でも演技者の主効果のみ有意であった。つまり、経験がない人も、経験が長い人と同じ判断をくだすということが示された。演技者の主効果については、「堂々としている」については、初心者<中間≒準熟達者という結果で、「しっくりきている」「イメージと合っている」では、初心者<中間<準熟達者であった。

自由記述

それぞれの文を、演技の表面的な部分に言及したものと、表面的でない部分に言及したものに分けた (Figure 6)。分散分析の結果、未経験者、短期・中期経験者においては表面的でない部分についての発言よりも表面的な部分についての発言が多かったのに対し、長期経験者はその逆であるということが示された。

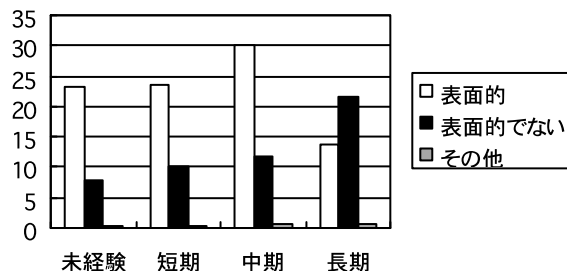


Figure 6. 自由記述結果

すべての結果をまとめると、演劇経験のない者や、経験の短い者は、演技者を評価する際、どのような評価項目においても、演技の中間群と準熟達者群を区別できないことが示された。未経験者・短期経験者は、演技の表面的な部分しか見ることができず、この表面的な部分については中間群も準熟達者群も同様のレベルであるため、この2群を区別できないと考えられる。しかし経験が長くなっていくにつれ、表面的でない部分をも評価基準とするようになり、3群を区別したり、評価項目によって多様な評価をするようになると考えられる。自由記述で演技の長期経験者が重視していた表面的でない部分とは、「軸のぶれがない」、「演技が小さくまとまっている」、「ただ『居る』ことができていく」など、非常に感性的なものであった。演劇経験はないがよく観劇をおこなう人を対象に同じ実験をおこなったところ、結果は演劇未経験者と同様の結果になり、この、演技における感性ともいえるものは、演技を見る経験によってではなく、自らが体を動かして演技を体験することによって獲得されることがわかった。

演技を修正しようという意図

最後に、初心者は Figure 1.で示したようなプロセスを経ようという意識すらない可能性があることを紹介する。練習の様子を観察すると、初心者俳優の中には、セリフを言い終わった直後に間髪いれずにまたすぐにセリフを発するなど、練習中に何度もやみくもにセリフを繰り返す、特にセリフの言い方に変化が見受けられない者が存在した。一方準熟達者になると、一度セリフを言ったあとにしばらく考え

る時間があり、次に発するセリフの言い方は、その前の言い方から大きく変化しているという場面が多く観察された。初心者の中には、そもそも練習中に自らの演技の評価や修正をあまりおこなおうとしない者がいる可能性が考えられる。

まとめ

本研究では、演劇俳優が練習において、自分の遂行した演技を客観視し、それを評価し、悪い部分を修正して演技を改善していくというプロセスにおける熟達化を検討した。初心者には、演技をした時に得られる身体感覚のみから自分の演技が他者にどのように見えるのかを把握することが難しく、その能力を補うために積極的に鏡を利用しようとするのがわかった。演劇や舞踊の練習場が鏡張りになっていることが多いのもこのためであると考えられるし、ビデオフィードバックなども有効な支援策として考えられるだろう。しかし、ビデオなどを通して正確に自らの演技を客観視できたとしても、それを評価する能力にも熟達差があり、経験の浅い者は声・動作・表情などの、演技の表面的な部分しか評価することができないのにも対し、経験の長い者は、感性的な評価もおこなうことが明らかになった。この感性的な熟達は、自らが身体を使って演技をおこなうということを通して身につくと考えられ、演技の経験を積むことの重要性が示されたといえる。また、初心者の中には練習を通じて自らの演技を振り返って吟味しようとしていない者がいる可能性も示され、練習でおこなうべきことを最初に教示する必要がある。

参考文献

- [1] 大浦容子 (2000) 創造的技術領域における熟達化の認知心理学的研究. 風間書房.
- [2] Ando, H. (2007) Expertise of actors: Three viewpoints in acting. *Psychologia*, **50**, 5-14.
- [3] 生田久美子 “わざ”から知る. 東京大学出版会.
- [4] Oura, Y., & Hatano, G. (2001) The constitution of general and specific mental models of other people. *Human Development*, **44**, 144-159.
- [5] Ando, H., & Koyasu, M. (2008) Differences between acting as if one is experiencing pain and acting as if one is pretending to have pain among actors at three expertise levels. In S. Itakura, & K. Fujita (Eds). *Origins of the social mind*. Springer. pp.123-140.